



SHIWAZAKI-KARINAWA
Special Interview
新潟で働く
私たちの思い
Vol. 02
NUCLEAR POWER STATION

中田 エミリー × 齋藤 晴樹

2017年11月取材 PR

耐えられるように、耐震補強を行っています。私のチームはその設計を担当しています。他には、大きな竜巻が起ころうとも飛ばされぬようにしっかりと固定したり、発電機の起動スイッチを遠隔操作できるようにしたりと、どんな災害が起きても電源を確保できるように対策を進めています。



中田エミリー
新潟出身。NST新潟総合テレビを経て、現在フリー。
その明るいキャラクターで活躍中の人気のアナウンサー。

齋藤 難しい問題を前に悩むことも多いんですが、私の部署の上司や先輩は、若い私たちの疑問にいつも耳を傾けてくれますし、解決策を導き出すために、とことん議論に付き合ってくれます。そのおかげで自分の設計したものを形にすることができています。

中田 それはやりがいを感じますよね？
齋藤 そうですね。やりがいはもちろんあります。また、先入観や前例にとらわれず新しい視点で設計や改善を行うことは、私たち若手にしかできないことだと思っていて、より高いレベルの安全を目指すためにも、積極的に取り組んでいかなければならないと感じています。

中田 そうなんです。これからの仕事の目標はありますか？



齋藤 自分が携わる一つひとつの安全対策に決して妥協せず、とことん高いレベルを追求して、新潟のみならず安心していただけるような発電所を作っていきたいと思っています。

中田 これからの発電所に必要なものって、何ですか？
齋藤 今の取り組みはお聞きしたんですけど、若手だからその視点で、これからやってみたいと思っていることはありませんか？
齋藤 最近思っているのは、新潟のみならずとのコミュニケーションです。
中田 コミュニケーション、足りてないですよね。発電所が何をやっているのか、まだまだ私たちにわからないですもんね。
齋藤 発電所の取り組みは、技術的な話も多いので、お伝えするのはなかなか簡単ではないと思いますが、特にこれからの新潟を支える、自分たちと同じ若い世代の人たちに興味を持ってもらうためにも、もっと私たちが手が積極的に情報発信をしていって、理解してもらえようようにしていきたいと思っています。そして、いいことも悪いこともどんどんコミュニケーションできるような関係を、新潟のみならずと作れるようになりたいと思っています。

中田 そんな関係になれるといいですよ。齋藤 はい、がんばります。

安全対策に新しい視点を。そして、見えてきたもの。

みなさん、こんにちは。中田エミリーです。新潟に暮らす私たちにとって、近くに原子力発電所があるのってなんだか心配です。前回は、津波や浸水の対策に取り組み40代の所員さんにお話を伺いました。そして今回は、ガラスと変わって、若手所員さんに突撃しちゃいます。20代の若者から見る原子力発電所って、どんなところなんだろう。

事故後のなになぜ原子力発電所で働きたいと思ったんですか？

中田 齋藤さん、今日はいろいろ聞いちゃいますけど、よろしくお願ひします。まず、いきなりですが、齋藤さん、すごくお若いですよ。齋藤 はい。平成26年に入社したので、今年で4年目になります。

中田 ということは、福島第一原子力発電所の事故のあとですか？
齋藤 はい。事故後に採用が再開してから、最初の新人社員です。

中田 そういふ時だとか家族とか周りの人は反対したんじゃないですか？
齋藤 反対はされませんでした。が、やっぱり心配はされました。

中田 それなのになぜ入社されたんですか？
齋藤 私は大学でエネルギーについて学んでいたんですが、学ばば学ばほど、資源をほとんど持たない日本にとって、原子力発電が果たす役割はとて大きいと感じるようになりました。ですから、事故後信頼が失われてしまった原子力発電をもう一度安心して活用できるようにするために役に立てないかと思って入社しました。

中田 若いのにちゃんと考えているんですね。齋藤 そ、そうですか。

中田 若いのにちゃんと考えているんですね。齋藤 そ、そうですか。

若手の所員って、どんな仕事をしているんですか？

中田 齋藤さんは、今はどんな仕事をしてるんですか？
齋藤 今は、緊急時の電源対策に携わっています。

中田 緊急時の電源対策ですか？
齋藤 福島第一原子力発電所の事故では、津波ですべての電源が失われて原子炉を冷やすることができなくなり、重大な事故にいたってしまいました。その反省をふまえて、万が一の場合でも電源を確保できるようにするのが私の仕事です。具体的には、ガスタービン発電機車の強化などがそうです。発電機車は、津波の被害に遭わないように、高台に分散して配備されていますが、さらに、巨大な地震があっても



※安全を確認の上、防護メガネをはずして撮影しています。

Q 電源を確保する対策って、他にはどんなことをしているんですか？
A 教えて、林さん。



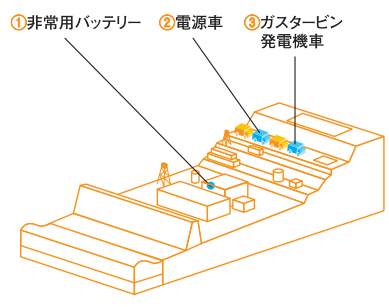
はい、お答えします。柏崎刈羽原子力発電所では、何重にも安全対策を準備し、もしもの時に大きな事故に進展しないように備えています。今回、その中でも電源対策についてご説明します。

福島第一原子力発電所事故では、津波ですべての非常用発電機やバッテリーが使えなくなり、電源を喪失したことが、過酷な事故への引き金となりました。その反省から、柏崎刈羽原子力発電所では、非常用の発電機や電源車、バッテリーなどを設置する対策を行っています。

まず、事故以前から非常用電源として設置されていたバッテリー(図①)が、緊急時には24台あり、緊急時には電源が必要な場所まで出動して電気を供給することができます。

ガスタービン発電機車は、重要機器などに電気を供給することができます。大容量の自家発電機です。ガスタービン発電機車から原子炉のある建物などへは、直接電気を送ることができるように専用のケーブルが敷設されています。

このように、柏崎刈羽原子力発電所では、何重にもおよぶ設備で、様々なリスクにも対応できるように、緊急時の電源対策を行っています。



東京電力ホールディングス
新潟本部
本部長補佐 林幹夫



東京電力新潟本社 検索 <http://www.tepco.co.jp/niigata/index-j.html>



東京電力ホールディングス 新潟本社
025-283-7461 9:00~17:00
(土日・祝日・年末年始除く)